

手紙による実践例－中学時代の恩師へ－

恩師への手紙

拝啓

毎日、うっとうしい天気が続きます。その後お元気でいらっしゃいますか。私は毎日元気に過ごしております。

さて、このごろ私は充実した日々を送れています。私が何をしているのかと言いますと、とある中学校で理科の教師、ソフトボール部の顧問をしており、大会が近づくにつれて生徒共々気合いが増している次第であります。

中間テストが終わり、ほっとするひまも無く、すぐに支部中体連総合大会です。生徒たちも大変ですが、やはり先生方も大変なのですね。この仕事に就いて初めてそれが分かりました。

「教える」ということは、私は教師の永遠の課題だと考えています。どんなに分かりやすく授業をしたつもりでも、完全に理解した生徒と、完全には理解できていない生徒、恐らくは後者の方が多いのではないかと思います。

そして、それをいかにして生徒全員が理解できるような授業にできるか、やはりまだ私には分かりません。生徒たちにどのようにして授業を完全に理解させるかが、私たち教師の永遠にして最大の課題なのだと、このごろよく感じます。一生かかっても解決しないかもしれませんが、この仕事を選んだからには精いっぱいやってみるつもりです。

「生徒に分かる、楽しい授業」を目標に一生をかけて「教師」という職業を極めていきたいと思います。

先生のご健康を心よりお祈りいたします。

敬具

平成〇〇年〇月〇日

〇〇〇〇先生

「10年後の自分の立場で中学時代の先生に手紙を書く」という設定のもとで書いたものです。相手意識や目的意識を明確にし、手紙という形式にすれば、このような文章を書くことができます。この実践には相手がいるため、特に相手意識が強くなります。それが、生徒の思いを引き出し、心のこもった手紙へと結実することになります。また、文章を書きながら、相手の立場を思いやる意識を育てることもできます。いかに相手意識をもたせるかがポイントとなります。